

吉野先生とのお別れ・

出会い・かいこう（邂逅）

山口 信 治

また1つ、ボクのところから大きな星が消えてなくなってしまった。

いつ、どこで、このかなしい知らせをきいたのだろうか。おわかれは覚悟していたものの、現実となったあの知らせはとても悲しかった。いつも思うのだが、後悔というのかおわかれをしてからが、ああもしておきたかったとか、こうしておけばよかったと、悔悟の念が先立つものだが。しかし、今回、吉野先生とのおわかれには、このような悔いはない。だからといってサバサバしているというのではない。あの重い悔いから1種の開放とっていいのだろうか。こころの内は、お別れと出会いそして邂逅となって昇華しているからだろうか。

では、どんな事が2人の間にあったのだろうか？これをすこしふれて、この責をはたさせてもらいたいと思う。

そのきっかけは、病後職場に復帰されてからである。多少お痩せになっても学生の待つ講義室にはいられると、細いうでをまくり板書するおすがたに、実はまいってしまった。ボクならプラットホームにだって立てないだろうに、90分の授業をすませ、ご自分の研究室にもどられ、いすに腰をおろされ一息いれられたころドアをノックする。

そして、先生から話を切りだしてきた。内容は意外な気がしたが、充分先生の胸中を察すれば理解できることだ。「先生ね」と、ボクを先生よばわりをされる？そして、ある類似性（iconicity）を質問してきた。類似性ね、C. パースがつかったアダプションである「わかれ」「であい」「かいごう」、これらに共通した意味的特徴であるといっているが、ボクにあたらしい発想や発見を促そうとしたもので、ドメイン（イ）、とドメイン（ロ）さらにはドメイン（ハ）との間に、各要素を橋わたす媒介的な要素をつかませる、ことばあそびに誘っ

てくれた。やまいを通して「死」は、生きている者の問題であることを、さらには自分の死ぬことを知っているのは人間だけだということ、だから生きている者が死んでいく人々と自己同一することのむづかしさを、煎じつめれば死に関する社会問題の解決の困難さをさとされようとしたのではあるまいか？。当時ボクはそれをやっきになって解決させようと力んでいたことは事実だった。国際ホーラムでその問題を提示して議論しなければならなかった時と符合する。先生はその問題に直接触れようとはされなかった。でも、解答を用意してくれていた。

いつしかどちらかからとは判明しないが、坂口安吾のことにはなしがすすんだ、ふしぎですね、かれの作品のうちで『風博士』『さくらの森満開の下』、どちらも結末は、小説の主人公が「かぜ」であったり「水」とか「空虚」になっています。2人の共通した意見は「きえてしまう」ことがらへの関心だったのだろうか。さかんに意気があがった。そしてこんなことを不意に発言された。「いきながら、そのたましいはし（死）のそう（相）を、ちょうかく（聴覚）も、かんかく（感覚）も、しょっかく（触覚）も、ほとんどなくなっている。」さらに続けて「はらのした（下）はし（死）のつめたさがあった」と。

ある研究者によると、さきの「風」や「みず」や「空虚」はみんな消えてなくなるものだが、その類似性について「死」をデホルメしかつ茶化したものだとか。あとでわかったことだが、安吾の類似性は次のことを図式したものだろう。つまり、「死」=女=美・芸術=芸術家（「生」きる男）と問い、ついに「死」と「生」（男女の同一化）を「生きたもの」と解釈したもののおもえてならない。

先生がおりにふれ読書していた本のなかに、ランボー『詩の家出』の写しがあった。

Je ne parlerai pas, je ne penserai rien;
Mais lamour infini me monfera dans lame,
Et j'iraloinbien, loin, icomme un Bbohemien,
Parla Nature, Heureux comme avec une femme.

ボクはしゃべるまいね なにも考えないことにしよう。

でも、そうしていても、愛がボクのたましいをかけ昇ってくるだろう
そうしたら、ボクは遠くにゆこうと。ずっと遠い遠い、ボヘミヤみた
い遠くへ

自然という道を通して、それはもしかしたら女性と連れだっているよ
うに

しあわせなんだろうな。(山口 訳)

あ、これだったんだ、ドメインをつなぐ意味がは、／

(やまぐちしんじ 佛教大学社会学部応用社会学科教授)